

バンクーバーにおける日本人移民社会とスペイン風邪 ——日本語新聞『大陸日報』からの分析——

河原典史

I はじめに—世界を襲ったスペイン風邪—

スペイン風邪は、1918年から1920年にかけて全世界的に大流行したH1N1亜型インフルエンザの通称である。このインフルエンザによって、当時の全世界人口の27%にあたる約5億人が感染、死亡者数は1億人を超えていたという¹⁾。流行源は特定できていないが、初期にスペインから感染拡大の情報がもたらされたため、この名が広く知られている。第一次世界大戦中であつたが、中立国のスペインは情報統制下になく、感染症の実態が自由に報道されていたのである。

1918年3月4日、アメリカ合衆国カンザス州のアメリカ陸軍基地で兵士が発熱し、頭痛や喉の痛みの報告が最初の症例記録とされている。この基地で始まった第1波の流行は、他のアメリカ軍基地やヨーロッパへ急速に拡大した。5月には北アフリカ、インドや日本にも感染が拡大した。6月には中国でアウトブレイク（集団発生）が報告され、7月にオーストラリアに達した後、パンデミック（伝染病の世界的な大流行）の第1波は収束を始めた。

1918年8月、変異による毒性の高まったウイルスの流行が、アメリカ・ボストンとフランス・ブレスト、そして西アフリカのシエラレオネでほぼ同時に発生し、第2波が始まった。2カ月のうちに感染は北アメリカ全土に拡大し、その後に中央アメリカから南アメリカにも到達した。1918年9月末までに感染はヨーロッパのほぼ全域に広がり、やがてロシアにも拡大した。さらに、シベリア鉄道を通じて北アジア全域へと持ち込まれたスペイン風邪は、ペルシア（現・イラン）にも達した。9月にはインド、10月には中国と日本にまで到達したものの、第2波は12月にはほぼ収束した。

1919年1月、第2波による被害を免れたオーストラリアを第3波が襲い、12,000人以上を死に至らしめた。その後、アメリカ・ニューヨークとフランス・パリに到達した第3波は、欧米では同年夏までに収束した。しかし、その後にチリやペルーなど南半球の国々に遅れて到達した第3波は、1920年1月から2月にかけて日本にも襲来した。

日本では1918（大正7）年4月、日本統治期の台湾へ巡業中の大相撲力士が感染症で急死した。同年5月に東京で開催された夏場所では、高熱により休場する力士が続出したため、このスペイン風邪は「相撲風邪」や「力士風邪」と呼ばれた。8月に日本本土に上陸したスペイン風邪は、10月には大流行に至った。当時の人口の43%にあたる約2,400万人が感染し、およそ39万人が死亡したとされる。

本稿では、スペイン風邪に襲われたカナダのバンクーバー、特に日本人移民社会の対応について考察する。そのとき、日本語新聞『大陸日報』を時系列的に精査する²⁾。掲載記事の見出し

について、「スペイン風邪」「スペイン感冒」「スパニッシュ感冒」「インフルエンザ」や「フルー」、ならびに「時疫」「流行病」を検索語に設定した結果、合計73記事が取り出された。さらに記事の他にも、掲載された訃報も参考にした³⁾。

II カナダ日本人移民社会の萌芽

1 カナダへ渡った日本人

最初にカナダへ移住した日本人は、長崎県南高来郡口之津（現・南島原市）出身の永野萬蔵とされている⁴⁾。1877(明治10)年にイギリス船の水夫として渡加した彼は、カナダ西部のニュー・ウエストミンスターでサケ漁業に従事し、やがてプリティッシュ・コロンビア州（以下、BC州）都・ビクトリアで宿泊業や雑貨業を営んだ。1888（明治21）年には、和歌山県日高郡三尾村（現・美浜町）出身の工野儀兵衛がフレーザー川河口のステーブストンに渡り、彼の呼び寄せとその後の連鎖移住によって、和歌山県沿岸部から多くの人びとがカナダへ渡った。彼らの多くはサケ缶詰産業に従事し、漁業ライセンス（漁業権）を取得してサケ刺網漁業に従事した。BC州北西部のナース・スキナ川などの河口にも、多くの缶詰工場が建てられ、そこでも日本人はサケ漁業に就いた⁵⁾。

ハワイ、アメリカやブラジルとは異なり、カナダへの移民の多くは血縁・地縁関係者による呼び寄せを中心とする自由移民が多かった。しかし、移民斡旋会社を介する契約移民も存在した。1891（明治24）年に神戸移民会社によって広島県、翌年には福岡県からバンクーバー島中央部のカンバーランド炭鉱へ契約移民が送られた。その後、東京移民合資会社はバンクーバーの日加用達会社と提携し、1907（明治40）年6月から翌年1月にかけて約1,500名の契約移民をカナダへ送り出した。カナダ到着後に日加用達会社を経て、およそ1,000名は鉄道保線工としてカナダ太平洋鉄道（Canadian Pacific Railway, 以下 CPR）の沿線、約500名は炭鉱夫としてカンバーランドをはじめとする炭鉱へ送られた。

日本人移民が最も集住したのは、バンクーバー港南岸であった。1885年に全通したCPRの終着駅が置かれた当地区は、陸海交通の結接点となった。ここでは海上にも貯木場が設けられ、製材所が連立した。そのひとつであるヘイスティング製材所への雇用を契機に、日本人が集住するようになった。やがて、同胞を顧客とする宿泊所や商店が開業し、東西に通じるパウエル通、特に1～300番地を中心に日本人街⁶⁾が形成されたのである。

そのようななか、1907年9月8日に約6,000人も日本人の上陸に反対する白人がパウエル地区を襲撃した⁷⁾。このバンクーバー暴動を重くみた日本・カナダ両国は、翌年にカナダ労働大臣の名前を冠したレミュー協定を制定した。これによって、原則として年間400名の日本人移民を上限とし、日本からカナダへの渡航は「呼び寄せ」という形態へ落ち着いた。そのため、郷里に残してきた両親や妻子、特に独身男性では写真の交換によって婚約し、婚姻後に新妻が渡加する「写真婚」が多くなった。その結果、1910年代後半になると日本人移民には、カナダへの定住と家族の形成がみられるようになった。

二世の誕生によって、日本語や日本文化を学ばせる教育機関の設立が望まれた。1906年には、バンクーバーのアレキサンダー通に^{バンクーバー}晩香坡共立国民学校が誕生した。この日本語学校の設立には、

前年における日露戦争の講和条約・ポーツマス会議後、帰国の途にバンクーバーに立ち寄った外務大臣・小村寿太郎による150ドルの寄付が基金となっている。この後、各地の日本人集住地には、日本語学校の創設がみられるようになった。

1909年と1923年における日本人の就業構造は、表1の通りである。前者で最も多くの日本人が就いていたのは、34%を占めるサケ缶詰産業を中心とする漁業である。それに次ぐのが伐木業や製材業、そして鉄道労働が続いた。当時、約8,000人の日本人労働者のうち、これらの肉体労働に就く日本人は7割を上回っていた。その後、

1923年における約9,000人の労働者のなかで、最多の業種は漁業から伐木業や製材業に代わり、鉄道労働は約3分の1に激減している。それに対し、商業関係者は約1,800人に倍増している。つまり、出稼ぎ的な渡加であった日本人移民はサケ缶詰産業、伐木・製材業や鉄道保線業などの肉体労働から、バンクーバーを中心とする都市における商業・サービス業へも展開するようになった⁸⁾。出稼ぎから定住社会へ、そして二世の誕生によって日本人移民社会が発展していく1918年、世界的なパンデミックとしてスペイン風邪がバンクーバーを襲ったのである。

2 カナダ日本人移民社会の医療体制

カナダで最初に医療に携わった日本人は、1889年にアメリカから移ってきた山村梅次郎という歯医者であった（表2）⁹⁾。日本からの渡加では、1893（明治26）年に現在の京都府立医科大

表1 カナダ日本人移民の職業構成

職業	1909年	1923年		
		男	女	計
漁業	2,770	624		624
漁業労働		660	391	1,051
伐木、製材、パルプ	1,600	2,865		2,865
鉄道労働	1,400	479		479
商業		235	14	249
雑営業	770	993	93	1,086
医師、僧侶他		414	29	443
鉱山労働	500	446		446
農業	300	533		533
農業労働		248	7	255
家内労働	300	444	71	515
雑労働		241	20	261
木材業		6		6
その他	350			0
合計	7,990	8,188	625	8,813

大陸日報社編（1924）『加奈陀同胞発展史 第三』、58より作成

表2 バンクーバーにおける日本人社会の医療体制

年	内容
1889	アメリカから歯科医・山村梅次郎がバンクーバーへ来る。
1893	シアトルより渡加した歯科医・隈元清が開業。その後、眼科医・石原明之助、外科医・木下徳太郎などが相次いで開業。
1895	スティブストンで教会堂が完成。黄熱病やチフス患者の流行により、スティブストン漁業団体の病院（団体病院）となる。
1898	サンフランシスコから渡加した曾我医師がBC州の医療免許を所持していなかったため、医師法違反で起訴。団体病院に対して、日本人医師裁判事件が起こる。曾我を看護長とすることで裁判が終了。これ以降、BC州の医師免許を所持していない石原らの日本人医師たちは、薬局として医療活動を行なう。
1905	石原明之助らと顧問医・クリアーによって、日本人療養所がバンクーバーにて開業。
1906	同志社女学校を中心とするキリスト教関係者による呼寄せにより、大木繁子が助産婦として働く。
1908	東京濱田産婆学校の卒業生・立石哲子が渡加し、団体病院で看護婦・助産婦として勤務する。
1909	立石哲子がバンクーバーで独立助産婦として開業する。
1912	団体病院は在バンクーバー日本領事館に助産婦の斡旋を依頼し、東京帝国大学病院より助産婦を呼び寄せる。
1916	日本人医師の下高原幸蔵がBC州医術開業試験に合格し、カナダで最初の日本人公認医となる。
1918	バンクーバーでスペイン風邪流行。ストラスコナ小学校に日本人特設病院が開設する。スティブストン病院にて産室が建設され、二世の誕生増加に対応した環境が整う。
1919	下高原を院長とし、木下・高橋・石原の各医師の協力もあり、日本病院がバンクーバーで開業する。野村政太郎がカナダの歯科医の試験に合格し、日本人最初の公認歯科医となる。
1920	団体病院は在バンクーバー日本領事館に再び助産婦の斡旋を依頼し、東京帝国大学病院出身者を呼寄せする。

橋本佳奈（2019）「バンクーバーにおける日本人助産婦の呼寄せルートと活動状況－1900年代から1920年代を中心－」、移民研究年報25、63-80より作成

学を卒業した京都市出身の石原明之助である。眼病のトラホームによって入国制限を受ける日本人が多かったため、カナダ日本人移民社会では眼科医が求められていた。ただし、日本の医師免許の取得だけでは、当時のカナダで医療に携わることは許可されなかった。そのため、石原をはじめとする日本人医師は、薬剤師として医療活動に従事せざるをえなかった。

日本人移民社会の発展にともなう二世の誕生によって、助産士の需要が高まった。当時の同業は助産婦として女性に特化しており、そのルートの一つとして同志社女学校看護専門学校の出身者がカナダへ渡った。先述した京都市出身の石原明之助の妻・マスはキリスト教徒であり、そのネットワークによって渡加者が生まれたのである。一方、外務省を通じた東京濱田産婆学校（現・東京大学医学部）からも、助産婦が海を渡った。

さらに、鹿児島県揖宿郡指宿村出身（現・指宿市）出身の下高原幸蔵が、カナダで最初の日本人公認医師として活躍した。1885（明治18）年に下高原家の八男として生まれた幸蔵は、1900（明治33）年7月に旅順丸に乗船し、カナダ・ビクトリアの土を踏んだ（図1・写真1）¹⁰。その後、1910年にアメリカのコロンビア大学へ入学した彼は、シカゴで医療技術を修得した。1916年にビクトリアに戻った下高原は、やがてバンクーバーでカナダ最初の日本人公認医師として活躍したのである。このように、日本人移民社会における医療体制が整備されはじめたころに、スペイン風邪がバンクーバーを襲ったのである。



写真1 下高原幸蔵医師の近影
（下高原ファミリーより提供）

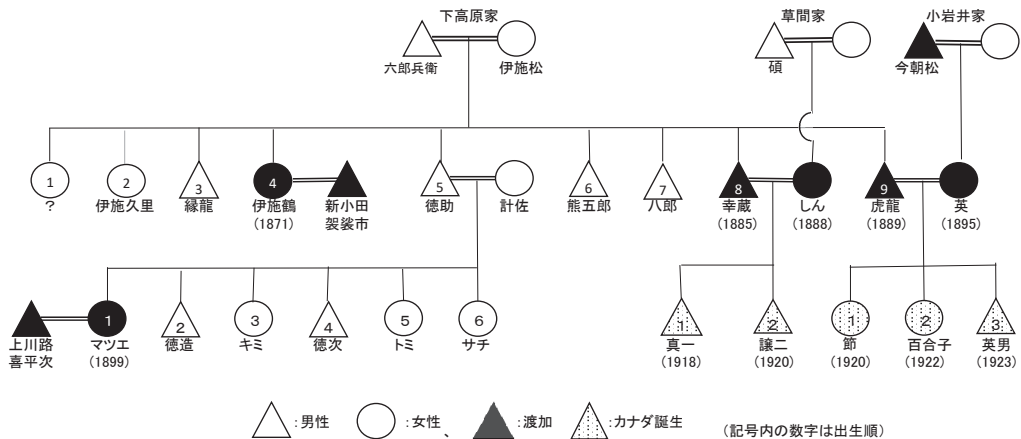


図1 下高原幸蔵医師をめぐるファミリーツリー
（下高原ファミリーからの聞き取り調査により作成）

Ⅲ 『大陸日報』にみるスペイン風邪

1 バンクーバーの日本語新聞

第二次世界大戦前のバンクーバーには『加奈陀新報』と『大陸日報』、そして『加奈陀毎日新聞』という3誌の日本語新聞が発行されていた¹¹⁾。『加奈陀新報』は、日本メソジスト協会の牧師・鏑木五郎が1897年7月に発行した週刊新聞『晚香坡週報』に遡る。それは1903年11月に活版を使用した『加奈陀新報』となり、翌年2月に日刊新聞に発展した。一時、飯田道左に経営が譲渡されたが、後述する理由によって再び鏑木が営むようになった。『加奈陀新報』はカナダへの同化を薦めるキリスト教系の新聞であったため、バンクーバーの日本人移民社会のなかには仏教開教師の派遣、そして新しい日本語の新聞の発刊が望まれた。そこで、1905（明治38）年にカナダへ渡ったのが佐々木千重であった。福井県今立郡服間村（現・越前市）出身の佐々木は、翌年にカナダ仏教会を設立した。仏教会幹部の賛助によって、彼は週刊雑誌『仏の教へ』の発刊を準備した。そしてバンクーバーの日本人有力者とともに、反同化志向の新聞発刊が目指された。その要人が、先発した『新報』の鏑木と袂を分けた飯田であった。そして、1907年6月22日、カナダ第二の日本語新聞『大陸日報』が創刊されたのである。なお、当初の社長は先述した飯田であったが、翌年2月から山崎寧に代わった。また、同年6月に創刊された週刊新聞『週刊日加公論』は、翌年から日刊『加奈陀毎日新聞』へと発展した。

これら3誌の日本語新聞のうち、まとまって現存するものは『大陸日報』だけである。反同化を謳う仏教会寄りの紙面構成であることに留意しつつ、本書では『大陸日報』の内容を分析する¹²⁾。

2 スペイン風邪の到来

『大陸日報』をみると、1918年9月23日に「スペイン風邪」が初出し、一種の流行性感冒であると記載されている（表3）。9月25日には、カナダ東部のトロントで感染があり、翌日の記事では鉄道交通によって西方へ蔓延してくるおそれが報じられている。そして、10月1日にはバンクーバーにも数名の罹患者が現れたのである。

バンクーバーでは感染拡大の防止のため、劇場や学校の閉鎖が検討されはじめた。10月11日の記事を見ると、バンクーバー製材所「吉田ボッス」、つまり吉田某をリーダーとする簡易宿泊所に泊まっていた邦人労働者が風邪にかかったようである。当初、スペイン風邪か否かは不明であったが、後日に彼らは陽性患者と確認されている。10月16日、ビクトリアでは新患者が100人を超えて合計370人になり、バンクーバーも同様であったと『大陸日報』は伝えている。日本人移民社会では、小学校やメソジスト教会の附属幼稚園などが閉鎖された。そして後述するように、国民学校で罹患した人たちを収容するべきだ、という報道が始まった。10月18日以降には、薬局や病院のスタッフ不足による特志看護人の募集記事が頻出するのである。

10月15日にはメソジスト教会の演奏会の延期だけでなく、国民学校が閉鎖を執行し、罹患者の一時的な収容が検討された。ところが10月18日には、これに反対する記事が掲載された。学校の隣に住む福岡県京都郡小波瀬村（現・荻田町）出身の鹽見音吉が、スペイン風邪の近隣への感染拡大を懸念し、罹患者の受け入れを拒否したのである。そこで、日本人移民社会は近

表3 『大陸日報』にみるスペイン風邪の初期報道

掲載日	内容
9/23	スパニシ風邪と名づくる一種の流行性感冒、目下各地に流行しつつある。
9/25	同病はすでに加奈陀東部に入込みおりて、オンタリオ州ナイヤガラ・キャンプには6名の死者あり。一昨日あたり罹病者三百人を越え、ケベック州はオンタリオ州よりも猛烈にして、加特力学校の如きは休校しいる程なり。
9/26	ボストンでは十日間に病死者600名。鉄道交通によって西部へ蔓延してくるおそれがあり、非常に警戒を要する。
9/27	サンフランシスコに新患者現る。ケベック州セントジョンは355人、しかして、すでにサンフランシスコにも新患者8人現れたり。
9/28	シアトル第13区海軍キャンプに発生。
10/1	スパニッシュ・インフルエンザの疑似患者が、遂に数名当市にも現れてきた。
10/8	数人のスパニッシュインフルエンザ患者が、軽症ではあるが市に現れた。
10/9	その後バンクーバーには流行の悪疫新患者は1人も出ておらぬが、形勢次第で劇場を閉鎖せしめえる。バンクーバーには、目下27人のスパニッシュインフルエンザある旨、今朝報せられた中10人は自宅で療養中、7人は昨日出た新患者である。
10/10	重症者はないが、市では必要とみれば、いつでも学校や劇場や公衆集会禁止の布告を発する準備を遂げている。
10/11	バンクーバー製材会社吉田ボッス方に、止宿の邦人労働者12名中6名まで感冒に罹り。衛生官から昨夜下高原氏まで電話があり、即夜同氏と高橋、石原の3氏出張したが、流行性感冒（インフルエンザ）ではあるが、スパニッシュインフルエンザとは云えない。
10/12	遂に邦人中から真症の患者が出た。バンクーバー製材会社労働者6人の分はスパニッシュインフルエンザでは無かったが、昨夜と今朝遂に3人の邦人は真症の患者として隔離病院へ送られた。
10/15	最近1週間に患者の数80人に達したが、病院は目下ほとんど満員の状況にある。スパニッシュインフルエンザはオタワ・モントリオールのごときその後猖獗依然たる。バンクーバー市邦人間においても、患者は日一日と増数の勢にあるそうで、既記患者の多くは肺炎に変症し、危篤の人も少なからず。
10/16	バンクーバー製材会社の吉田ハウスの病者中より3人は肺炎に変わりて、これまた危篤。ヴィクトリアでは昨日新患者100余名あり。総計370人に達し、バンクーバー市は昨日で合計300余に達した。
10/17	学校や公衆集合の場所を閉鎖せぬことについては、当局はこれがやはり正しい方途であると信じており、日本人側で国民学校閉鎖のことは昨紙に報じたが、メソジスト教会付属幼稚園、西第五街幼稚園ともに明日から休校に決定した。
10/18	シティー病院の看護婦も約半分は感染し、昨日死者2名を出したくらいで、白人医も1名危篤でいるが、要するに病院も手が回りかねている有様で、院長は下高原氏に対し邦人看護人が義勇的に出てくれれば非常に歓迎する意を述べ。
10/17	スパニッシュインフルエンザは、バンクーバー市においてはすでに400人近くに達しているが、これは普通市民のみで軍人を加算したらなお多数に上っている。普通市民412人、死者14人、軍人300人、死者9人とあった。昨日あたり学童の休校者2,200人に達し。日本人医会でも昨今の現況を捨て置きがたとし、昨夜日会事務所にて臨時病院開設に就いて協議し、下高原・高橋・石原三氏これに出席したが、領事の意見をも聞く。
10/18	決行の暁は国民学校をこれにあてんかと。シティー病院では日本人男女を問わず看護人の出ることを切に希望している。邦人仮病院は2ヶ月位の予定で、また目下邦人患者は40余名である。
10/18	当市のスパニッシュインフルエンザ昨日の新患者は、昨夜辺りは患者軍人を除いて619人、死者は軍人以外に16人であった。
10/18	特志看護人については応募中々に好成績を示し、白婦人の挺身する者もかなりの数であり、日本人もすでに申し出た人23名に達している。
	特志看護人の募集 右志望者は至急加奈陀日本人会へ御申出有りたし 加奈陀日本人会

注：10/18の特志看護人募集の記事は11/9まで続く

大陸日報社『大陸日報』（1918年9月23日～10月18日）より作成

接するストラスコナ学校に、邦人の避難所と病舎を置くことを決定したのである。

10月18日の『大陸日報』には、学校医のアール・ワイトマンによる感染防止や注意喚起が掲載されている。例えば、「子供は自宅内に留めよ」「自宅のヤード（庭）だけで遊ばせよ」「他の子供たちを自宅に招くことは避けよ」などがある。スペイン風邪は密接や密集によって感染することを理解し、その対策が講じられたようである。「ハンカチを持って口を覆い、他人との共有を避ける」「新鮮な空気を入れ替える」「子供が発病したら、すぐにベッドで休ませる」など、具体的な対策が記されているのである。

3 罹患者の諸相

『大陸日報』では、入・退院者や死亡者名も掲載されていた。初出の10月1日以降を時系列に説明すると、それは表4のようにまとめられる。10月10日には27人の罹患者、うち10人は

表4 『大陸日報』にみるスペイン風邪による入退院と死亡・訃報記事（1918年10月）

掲載日	実際日	入院	退院	死亡（記事内）	訃報
10/1		バンクーバーに発生			
10/10		27人罹患者 10人は自宅療養、 7人は昨日の新患			
10/12		川田徳雄 日賀野（傳作） 柳村氏・妻女			
10/16		岩鶴明夫（危篤） 小柳氏（危篤）			日向野傳作
10/17					辻松次郎
10/21					岩鶴明夫 来栖助次郎
10/23		足立貞富ほか44名	佐藤某	芦川洋服店主 沖村薬店主・愛息	船本善一 (21日死去)
10/24	10/23	山内又一ほか計11名	清水久吉	深見健次、深見タエ	
10/25	10/24	阿部孝之 浮田郷次（領事） 浮田義彦（郷次・息子）ほか 計21名	安中平 角田市松 高田義孝	辻惣太郎 黒川桂作 組田末吉 北川ミヨ 沖村薬局・愛息	井元飛那太郎
	10/25	原鹿造ほか計3名			
10/26		男8名・女3名・子供2名 計13名	角田市松	平万喜妻女・サエ子	宮川峰介 黒川佳作 井元飛那太郎
10/28	10/26	男9名・女2名・子供2名 計13名	角川政雄ほか計6名	死亡2名	北村さくらの 榊七平 青木勇 花月タミエ
	10/27	男3名・女3名 計6名	池田庄太郎ほか計7名	死者3名 増本 ¹	
10/29	10/28		浮田領事ほか計12名	福山コト	伊藤又吾 津曲勇助
	10/29	女2名	曾我太四郎ほか計4名	伊藤又吉、津曲勇助	
10/30	10/29	入院者13名	外川ツルほか計27名	喜納加郎 森山ふで	増本作市 ¹ 大倉わゑ ² 森山ふで 古江喜四郎
	10/30	入院者無し		曾我ミサヨ、鹿島光三郎 平萬喜、大倉ツエ ²	

注1：10/28死亡の増本は、30日に訃報が掲載された増本作市と思われる

注2：10/30死亡の大倉ツエは、同日に訃報が掲載された大倉わゑと思われる

大陸日報社『大陸日報』（1918年10月1日～10月30日）より作成

自宅療養の記事が掲載された。最初の入院記事は10月12日で、川田徳雄と日賀野傳作、そして柳村夫人の名前が確認できる。残念ながら、日賀野は10月16日に死亡したことが訃報で確認できる。

10月16日に入院・危篤者の岩鶴明夫もまた、21日に死亡記事が掲載されている。このように入院や訃報の記事を並べると、発症してから3、4日で命を落とす非常に厳しい状況が判明する。44名の入院患者が明らかになった23日頃が、バンクーバーにおけるスペイン風邪のピークであった。10月25日の記事には、日本領事館・領事の浮田郷次とその息子・義彦も罹患したが、幸いにも彼らは元気に退院したようである。流行の当初である10月12日には、訃報が1例しか掲載されていないが、ピークを迎えた11月2日になると、紙面の下半分が訃報記事で埋まっている。このような紙面構成からも、スペイン風邪の猛威がうかがえるのである。

11月に入ると入院患者は減少し、そして死亡者よりも退院者数が上まわるようになる(表5)。

表5 『大陸日報』にみるスペイン風邪による入退院と死亡・訃報記事(1918年11月)

掲載日	実際日	入院	退院	死亡(記事内)	訃報
11/1	10/31	入院6名	矢吹順二ほか計10名	岡部ミツエ 磯江キノ	田端八(小)千代 喜納蒲 磯江きの 平萬吉
	11/1	入院5名	磯江甚太郎ほか計3名		
11/2			山田寅吉ほか計11名	福江アキ ¹	福江マキ ¹ 池田三郎 中島とよ 西村キヨ
11/4	11/2	土方久元(危篤) 入院1名	矢野盛 内田静	森久左衛門	中川チヨノ
	11/3	入院10名	金井喜一郎ほか計5名	近藤繁	
	11/4		山田勘三郎・山田スミ		
11/5	11/4	入院8名	齊藤セツ・足立貞富	川口清吉	
	11/5		船本渉一ほか計7名	北岡幸二郎	
11/6	11/5		岩田サマ・坂田タ□ヨ	世森源次	内藤實語 川口清吉 岡部勝
	11/6	2名	金井格次ほか計3名		
11/7	11/6		高橋トヨ・立石テツ 門永哲・足立トミエ	管野ハル	辻亥之助
	11/7	4名	西吉哉・宮西ユキ 高橋幸・松本澤市 松蔵義治		
11/9					徳野茂三郎
11/18					中井能富士
11/19					伏木田市次郎 佐々木康一
11/20					濱口巖
11/21					橋本イト
11/22				河口きみ・河口俊雄・河口律子 寺村吉松・寺村秀吉 春川せつ	久世捨次郎
11/23					木村初次郎
11/25					西鶴太郎
11/26					佐藤萬七
11/27					引田堅高

注1: 11/2死亡の福江アキは、同日に訃報が掲載された福江マキと思われる

大陸日报社『大陸日報』(1918年11月1日～11月27日)より作成

残念ながら訃報も多いが、入院者は11月7日以降にはみられない。どうやらピークが過ぎ去りつつあることが、『大陸日報』の記事から読み取れる。

Ⅳ ボランティア活動の人びと

1 メソジスト協会の人びと

スペイン風邪の罹患者を看病・介護したボランティアの人たちは、表6にまとめられる。そのリーダーとなったのは、徳島県徳島市塙裏町（現・徳島市中洲町）出身の赤川美盈^{よしみつ}牧師である。もう一人の牧師である滋賀県犬上郡多賀村（現・多賀町）出身の清水小三郎、そして先述した医師の下高原幸蔵が中心になって活動した。カナダ日本人会評議委員で雑貨店経営者の内田仙太郎（埼玉県北葛飾郡豊岡村関宿：現・幸手市出身）、国民学校校長の佐藤伝（福島県双葉郡苅野村：現・浪江町出身）や旅館・食料品店経営店者の佐藤茂平（広島県深安郡引野村：現・福山市出身）¹³なども参加した。そして、赤川牧師の夫人・やすの（安子）をはじめとする8人の女性たちも活躍した。赤川牧師夫妻は、フレーザー川沿岸のニューウエストミンスターに居住しているが、他のメンバーはバンクーバーのパウエル地区に住んでいた。

表6 ストラスコナ学校における日本人ボランティア

名前	出身地	職業	家族（職業・出身地）		住所（1926年）
赤川 美盈	徳島県徳島市塙裏町	メソジスト教会牧師	妻・赤川やすの		ニューウエストミンスター コロンビア通 148
清水 小三郎	滋賀県犬上郡多賀村土田	牧師			
下高原 幸蔵	鹿児島県揖宿郡指宿村十二町	医師	妻・（草間）信子	茨城県筑波郡十和村	バンクーバー 西第10番街 1245
内田 仙太郎	埼玉県北葛飾郡豊岡村関宿	加奈陀日本人会評議委員 和洋雑貨			バンクーバー エール通 2798
佐藤 伝	福島県双葉郡苅野村	日本人学校校長			
佐藤 茂平	広島県深安郡引野村	食料品・旅館			バンクーバー アレキサンダー通 230
赤川 やすの （安子）			夫・赤川美盈 （牧師）	徳島県徳島市塙裏	ニューウエストミンスター コロンビア通 148
中村（文美子）	広島県		夫・中村辰喜 （加奈陀日本人会評議委員）	熊本県上益城郡白水村辛川	バンクーバー パウエル通 546
山崎 すの	長野県小縣郡塩尻村		夫・山崎平次	長野県小縣郡塩尻村	バンクーバー ラバーナム通 7476
中野 嘉子					
川部 貞子					
佐藤 節					
日比 忠子					
藤田					

SUSAN YATABE(2020) "AN ISSEI'S MEMOIR FROM AN EARLIER PANDEMIC" NIKKEI VOICE (<http://nikkeivoice.ca/>)
 中山訊四郎『加奈陀同胞発展大鑑 附録』, 1922年（佐々木敏二『カナダ移民史資料 第2・3巻』不二出版, 1995年）
 吉田龍一編『加奈陀在留邦人々名録』, 1926年, 1-173頁（佐々木敏二編『カナダ移民史資料 第6巻』, 不二出版, 2000年, 511頁）より作成

『加奈陀同胞発展大鑑附録』¹⁴⁾には、赤川牧師について次のように詳述されている。

【資料】¹⁵⁾

君は母国に於て青山学院に学び、卒業後直に東京銀座教会を牧するに至れるは明治三九年なり。同四十年米國遊学の目的を以て沙港に來り、同地同志舎に日曜説教を担当し、後に加奈陀に來り新西院市、サツパトン兩地日本人教会に牧師たる事一年、更にトロント市ヴィクトリア大学に入りて研擧二ヶ年、業を卒へて旧任に復し、歸來新西院にありて救靈に努め、八年度会々推されて、晩市美以教会牧師に轉じ、新西院サツパトン兩教会の牧師を兼ね。

このように、青山学院に学んだ赤川は、東京銀座教会を経て1907年にアメリカ・サンフランシスコへ渡航した。その後、カナダへ転じた彼は、トロントの大学で学んだ後、1918年にバンクーバーメソジスト教会の牧師に就いている。この資料の後半には、「戦慄せしめたる流行感冒のときに活躍」「病院を設けて、その係長」と、スペイン風邪に見舞われた日本人移民社会に尽力した記録が残されている。

2 寄付活動の諸相

ボランティアとして看病や医療に従事するだけでなく、日本人移民社会では寄附金の募集が開始された。10月21日以降の『大陸日報』には、ほぼ毎日にわたって募集記事が掲載され、次々に募金が届いた様子が見える(表7)。寄付者のほとんどは、バンクーバーで成功した事業家である。例えば、徳島県坂野郡北島村(現・北島町)出身の新見太平は、パウエル地区の薬局経営者であり、広島県比婆郡帝釋村(現・庄原市)に生まれた久岡文次は造船業を営んでいた。大分県宇佐郡北馬城村(現・宇佐市)出身の松山豊蔵、和歌山県日高郡比井崎村(現・日高町)出身の大出竹次郎は塩ニシン製造業で活躍した¹⁶⁾。佐賀県三養基郡北茂安村(現・みやき町)出身の立石純夫は『大陸日報』の記者であり、その夫人・哲子(テツ)は、助産婦として日本から渡加した¹⁷⁾。彼女は一時的に感染し入院したが、11月6日には退院したようだ(表5)。

現金だけではなく、さまざまな物品の寄附もあった(表8)。一例として、10月21日の『大陸日報』には病院用グラス、ワインや花束・鉢花などが確認できる。栄養価の高い果物や鶏卵などの食物もみられるが、注目すべき点は寝台、つまりベッドの寄附である。罹患者が激増してベッドが不足したため井上旅館¹⁸⁾、関根旅館や宮城旅館などの旅館が応えたのである。

バンクーバーにおける日本人移民社会とスペイン風邪（河原）

表7 スペイン風邪に関する日本人ボランティアへの寄付金

月/日	寄付金	寄付者	月/日	寄付金	寄付者
10/21	100	盛本商会の東山・此川、林福	11/1	100	藤田商会、日本人時計業組合（乾野ほか計10名）
	25	クインズ洋食店、鈴木菓子店、久國輒、貫名正倫		30	阿浦由松
	2	利根川		25	花月商会、上中恕一ほか計2名
10/23	100	澁谷商店、盛本商会、日本金融社	11/2	20	松山豊藏、鈴木洋服店、やな川、江畑商店
	50	近村徳太郎、客自動車（タクシー）組合（村田ほか計8名）		25	岩見與四郎
	25	秋山金物店、西穀	11/4	25	福島県人会
	20	小林琴次		20	重松盛吉
	15	宮崎重市ほか計3名		15	畑下五十次
	10	松島市三郎ほか計7名		10	今堀喜市
	5	吉田嘉市ほか計5名		3	堀源太郎
3	大屋幸次郎ほか計6名	11/5	100	大出竹次郎	
100	石川商店		20	ジェー・ケー氏	
50	須賀孝一		15	鈴木爲三郎	
10/24	30	香村商店	11/6	10	丸熊亭（熊野重吉）
	25	住吉菓子店、大倉洗濯所、安中平ほか計2名		10	下ノ園熊太郎
	10	朝長重行ほか計3名	11/8	50	ミッション農会
	5	吉田春吉ほか計5名		34	サンマランド農会
	3	大原信男ほか計4名		25	濱中ヨシ
	5	岡崎由之助		10	服部モトほか計2名
	2	松尾薫ほか計7名		5	宮川忠吉ほか計2名
10/25	50	バンクーバー日本人運送業組合（尾本ほか計10名）、高田洋服店	11/9	5	退院者・船本渉一（看護人の労を謝して）
	30	日本婦人会	11/12	30	日加用達会社、須賀孝一
	25	北村善太郎ほか計2名		20	三枝靴店、立石純夫
	20	山崎小太郎	11/13	10	有門彌太郎ほか計4名
	15	鈴木市太郎		5	中村文美ほか計2名
	10	牛島幸吉ほか計4名		15	熊本県人会、熊本県人青年会、山村萬太郎
	5	遠藤寅七ほか計6名		10	本田正男ほか計5名
30	浅野友次郎ほか計2名	7		浅野健藏	
20	田中洋服店、千鳥、田邊好子	5	吉良弘ほか計21名		
10/26	15	平井榮藏ほか計2名	注1：寄付金の単位はドル		
	10	八千代、田中政吉ほか計2名	注2：10/28の洋裁クリーニング組合の寄付は1人5ドルだが、合計は110ドル。その他、不明な点も多くある。		
	5	山下藤太郎ほか計3名	注3：大陸日報社『大陸日報』（1918年10月21日～11月13日）より作成		
10/28	110(5)	洋服裁縫クリーニング・ダイオーク組合（計20名連名）			
	50	堀七藏			
	30	加奈陀磯田青年会			
	25	新見太平、ボイヤ薬店			
	20	阿部孝之、垣見商店（颯田ラク・佐藤マツエ）			
	15	寺本鍼太郎ほか計3名			
	10	颯田和市ほか計2名			
5	高田常吉ほか計2名				
10/29	100	ステヴストン漁者慈善団体			
	30	佛教青年会			
	25	岩上幸太郎ほか計4名			
	20	久岡文次、やな川			
	10	藤井宗八ほか計4名			
10/30	5	林勝太郎ほか計2名			
	15	中野庄輔			
	10	村田九助ほか計2名			
	2	青木爲雄			

表8 病院への寄付活動

月/日	内容
10/21	病院用グラス(利根川) ポートワイン大瓶1つ(山下爲三郎) 花束2つ(柳澤源作・田村清作) 花(キリスト教婦人会) 寝台5つ(グランド・鎌田大井), 3つ(戎屋), 2つ(本田百太郎・近藤) 1つ(キングルーム・クラウンルーム・クレセント・赤澤卯吉ほか計9名)
10/23	花立2ダース(松宮外次郎) 看護用頭巾6つ・同着物6つ・日本タオル2ダース ・静養タオル3ダース・枕カバー2ダース(牛嶋商店)
10/25	【昨日】鉢花15鉢(キリスト教婦人会)切花(加藤定五郎・村西清作)ポートワイン2ギャロン(不明) 【本日】ベッド各1台(井上旅館・関根旅館・宮城旅館・中島齒科医・友光ほか計3名)
10/26	花束(山崎スノ・柳澤源作) ベッド1台(花田金季・伊藤廣) ポート・ワイン1瓶(山下藤太郎) 薬品(池田壽藏)
10/29	切花(山崎スノ・森嘉八・新見妻女など) 鶏卵10ダース(齋藤牧師) 林檎・梨1函(橋詰太四郎)
11/2	ウイスキー3本(岩見興四郎)
11/4	切花(田村清作) 植木鉢半ダース(キリスト教婦人会)
11/9	切花(伊岐伊三郎・東家燕遊)

注1: 山崎スノ(10/21・26・29), 新見妻女(10/29)は看護ボランティア

注2: 岩見興四郎(11/2)は寄付金も出している

大陸日報社『大陸日報』(1918年10月21日～11月9日)より作成

V 今後の課題—おわりにかえて—

1922年の第2波にあたって、女性宣教師を中心とするメソジスト教会のボランティアが活躍した。そこには下高原医師の妻・しんも参加している。1888(明治21)年に茨城県筑波郡十和村(現・常総市水海道川又町)の草間家に生まれたしんは、青山学院で英語を学び、名古屋と福岡の私立中・高校で英語の教員になった。その後に宣教師としてカナダに渡った彼女は、1917年に幸蔵と結婚した(図1)。彼女たちの活躍は、稿を改めて論じたい。

最後に、地理学者のSarah Buchananによる当時のスペイン風邪の分析¹⁹⁾を少し紹介する。それによると、バンクーバーにおけるスペイン風邪のピークは1918年10月であった。本稿で紹介した『大陸日報』で報道された入院・死亡者の変動と、この指摘は合致している。Buchananの報告によれば、バンクーバーでは、1918年から翌年に1,144名がスペイン風邪で亡くなっている。このうち13%にあたる153名がアジア人である。ただし、アジア人の最多を数えた中国人、そしてインド人と日本人との区別はない。また、地理学者の彼は感染者の居住地を地図化している。それによると、人口の集中するバンクーバー中心部に死亡者が多い。そして、都心部から縁辺部に向かうにしたがって、命を落とした人は少なくなっている。

残念ながら、本稿では日本語新聞である『大陸日報』の記事を網羅的に並べることに終始した。この新聞には日本人移民社会の詳細が報じられるものの、*Vancouver Sun*, *The Province*などの現地新聞と比較検討すると、バンクーバー全体におけるスペイン風邪への対応が判明する。今

後は他の資料，特にブリティッシュ・コロンビア大学特別資料室の日本語資料，外務省外交史料館の所蔵資料も精査していく必要がある。

注

- 1) スペイン風邪の概説については，以下を参照した。速水融（2006）.『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ—人類とウイルスの第一次世界戦争—』，藤原書店
- 2) 前掲 1). 日本でのスペイン風邪の対応について，速水は日本各地の地方新聞から検討している。
- 3) 日刊紙である『大陸日報』からは，バンクーバーを中心とするカナダ日本人移民社会の諸相が時系列的に看取できる。掲載記事以外にも，広告と訃報は重要な情報源となる。河原典史（2021）.『カナダにおける日本人水産移民の歴史地理学研究』，古今書院，31-33
- 4) 本節は，以下の文献を中心に本書のテーマに合わせて著者が整理した。
飯野正子（1997）.『日系カナダ人の歴史』，東京大学出版会
和泉真澄（2002）.『日系カナダ人の移動と運動—知られざる日本人の越境生活史—』，小島遊出版
佐々木敏二（1999）.『日本人カナダ移民史』，不二出版
新保満（1986）.『カナダ日本人移民物語』，築地書館
新保満（1996）.『石をもて追われるごとく—日系カナダ人社会史—』，御茶の水書房
新保満（1996）.『カナダ移民排斥史—日本の漁業移民—（新装版）』，未来社
末永國紀（2010）.『日系カナダ移民の社会史—太平洋を渡った近江商人の末裔たち—』，ミネルヴァ書房
ミチコ・ミッツ・アユカワ著，和泉真澄訳（2012）.『カナダへ渡った広島移民』，明石書店
- 5) 前掲 3). 79-124
- 6) その北に位置するアレキサンダー通の一部も含めて，本稿ではこの日本人集住地をパウエル地区とする。
- 7) 先に多くの日本人が渡航していたハワイでは，1898年にハワイ王国がアメリカ合衆国の準州へ併合された。これを契機に，アメリカ本土へ転航する人が多くなった。ただし，アメリカ合衆国では，日本人に対する差別的な排斥が進んでいた。そこで，比較的入国が容易であったカナダへの転航者が相次いだ。
- 8) 滋賀県出身の多くは製材所での従事や，その後に商業関係に就いた。山地部での伐木業や炭鉱業での従事者には，熊本県出身者が多かった。それに対し，サケやニシンを漁獲する漁業は和歌山県出身で占められていた。和歌山県人には，これらの生業と出身地との関係性を表現した「江州ソーミル，熊本ヤマ，死ぬよりましかなへレン獲り」と，いう俗言が伝わっている。
- 9) 本節は以下の文献を中心に，本書のテーマに合わせて筆者が整理した。橋本佳奈（2019）.「バンクーバーにおける日本人助産婦の呼称セレクトと活動状況—1900年代から1920年代を中心に—」，移民研究年報 25, 63-80
- 10) 指宿村をはじめ，カナダへの鹿児島県出身者の歴史は以下に詳しい。加奈陀鹿児島懸人会編（1913）『政腑公認加奈陀鹿児島懸人会史』。
- 11) 当時のカナダにおける日本語新聞の創刊については，以下の文献に詳しい。新保満・田村紀雄・白水繁彦（1991）.『カナダの日本語新聞—民族移動の社会史—』，PMC 出版，24-80 新保満・田村紀雄（1983・1984）.「戦前カナダの日系紙—一世の新聞と二世の新聞（上）・（中）—」，東京経大会誌，133・135・317-343, 91-142
- 12) カナダのブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）で発見された『大陸日報』については，マイクロフィルムとして同大学，日本では国会図書館や立命館大学などにも所蔵されている。現在，UBC と立命館大学は，同紙のデジタルアーカイブ化を進めており，見出しのデータベースを作成している。その結果，記事検索ができるシステムの完成が予定されている。本稿は，その試行による成果の一部である。

- 13) 佐藤茂平が経営する広島屋旅館・佐藤事務所から、1921年5月に『金田之栄－東宮殿下御渡欧記念・邦人児童写真帖－』（以下、『写真帖』）が発行された。この写真帖の形態は、縦20センチ×横26センチの横型、右側が紐で綴じられた197頁からなる。表紙に続いて、全体に「賜天覧台覧」の大きな文字が写るページをはさみ、「日本資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一の筆による「金田之栄」、そして「四海同胞」と記した大蔵官僚の添田寿一の書が続く。そして、毛筆による「晩香坡生レ日本人児童写真帖之序」が収められている。この序文の著者は、当時の貴族院議員・阪谷芳郎である。1908（明治41）年の欧米視察時にバンクーバーへ立ち寄った際、添田は発行責任者の佐藤茂平と知り合った。佐藤の序文には、1910年代以降の日本人移民社会では家族の形成と二世の誕生がみられるようになり、彼らの活躍の誇示が綴られている。渡加後に旅館業を営み、いくつかの職業を歴任した佐藤は仏教会や広島県人会の創立にも尽力した。この写真帖の解題を取めた復刻本は、以下の通りである。河原典史編著（2017）、『カナダ日本人移民の子供たち－東宮殿下御渡欧記念・邦人児童写真帖－』、三人社。その他の人たちの詳細については、別稿で改めて詳述したい。
- 14) 中山訳四郎（1922）、『加奈陀同胞発展大鑑 附録』、419（佐々木敏二（1955）、『カナダ移民史資料 第2巻』不二出版、455）
- 15) 一部の旧字体は、新字体に適宜改めた。
- 16) 前掲3）. 155-194
- 17) 前掲9）.
- 18) パウエル地区のジャクソン街322番地にある井上旅館の経営者は、井上倉次郎である。彼の出身地をはじめ、他の旅館経営者についても、別稿で改めて詳述したい。
- 19) Sarah, Buchanan. (2007). *Spanish Influenza in the City of Vancouver, British Columbia, 1918-1919*, Queen's University, 1-139.
<https://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.959.8731&rep=rep1&type=pdf>（最終閲覧日：2021年10月13日）

[付記]

本稿を作成するにあたって、下高原幸蔵に関する資料をご提供いただいた鹿児島県指宿市在住の下高原チヨ子様へ厚くお礼申し上げます。そして、『大陸日報』のデータベース作成の共同作業の機会を与えていただいたブリティッシュ・コロンビア大学アジア図書館のシリル・エシュギ館長と喜多山知子氏に感謝いたします。その作業に参加していただいた角田あさな様（立命館大学大学院先端総合学術研究科）に、末筆ながらお礼申し上げます。